

アイデアは個人の財産 尊重して製品に具体化する

新興セルビック（本社東京）は金型関連のアイデアを社外から募集、それに基づく製品を開発する会社。新興金型製作所（同）の社長も兼ねる竹内宏社長は、モノ作

りに関するアイデアを会社で考え出しても、それは個人の財産と考えるべきだと語る。アイデアの具体化を請け負う哲学を聞いた。

Q 新興セルビックはどんな活動をしているのですか。

A 世の中ではいろんな製品が開発されていますが、モノ作りの現場からアイデアが出てきたものは意外に少ないのです。現場の人たちは必ず問題意識を持っており、それを改革する意志も持っています。ところが、新しい試みをした場合に、うまくいけば良いのですが、うまくいかないと日常業務を優先しなさいといった批判を受けることになりがちです。だからアイデアがあっても具体的な製品にしようという提案にまで行きません。

新興セルビックはアイデアを製品にまとめる会社です。アイデアを出してくれるのは、新興セルビックの社員ではありません。モノ作りの現場に携わっている人が考え出したアイデアを持ち込んでくれるのです。

製品の売り上げの3%はアイデアを出した人に還元します。4%はプールして、金型業界が発展するための啓蒙活動に使おうと考えています。製品化に伴うリスクは、アイデアを出した人には一切かかりません。

Q 社外のアイデアを組織化しようという発想はどんな時に生まれてきたのですか。

A 新興金型製作所という金型メーカーの社長をしている関係で、納入

先を含めいろいろな企業の現場を訪れる機会があります。現場の“瞬間芸”のような技術を伝承したいと考えているので、そうした折に現場の人たちと親しく話をしてみるようにしています。すると、アイデアを持っていながら製品化に結び付けるチャンスがないと残念に思っている人たちが大勢いるのです。そういう人たちのアイデアに僕の感性を加えて製品が開発できればと考えたのです。

僕はこの5年間に、自分のアイデアで15点ぐらいの新製品を出しました。けれども自分のアイデアが枯れたらどうしようかという不安もありました。アイデアを提供する人にとっても、具体的な製品が生まれることは大変うれしいものです。僕自身が120以上のパテントを持っているので、アイデアの大切さはだれよりもよく理解しているつもりです。ですから、皆さんが僕を信頼してアイデアを裸のまま持ってきます。

Q 新興セルビックにアイデアを出してくれる人は皆さん金型メーカーで働いている人ですか。

A いや、いろんな業種の人があります。アイデアを出してくれるメンバーは今のところ50人くらいで、アイデア“軍団”と呼んでいます。メンバーがメンバーを紹介しますから、200人くらいまで増える可能性があ

ります。

何かを創造するという仕事は、例えば10人の社員を雇って一つの所に押し込んで、さあ考えなさいと言ってもだめです。アイデアは絶対に出てきません。アイデア軍団のメンバーは皆さんそれぞれ本来の仕事を持っています。軍団の仕事は、月に1度レポートを出していただくことだけです。後は何もありません。しかし、その方が社員を雇って1カ所に押し込めるよりも余程良いアイデアが出てくるのです。

Q アイデアを出せるかどうかは、結局のところ個人の能力や意欲によるのでしょうか。

A 良いモノ作りができるかどうかはセンスだと思います。じっと考えてもモノ作りのアイデアが出てこない人はいくらでもいます。

日本では「会社がこれだけのものを社員に与えて『考えなさい』と言ったのだから、パテントの権利は社員ではなく会社にあります」というのが一般的になっています。

けれども、同じ条件をそろえて同じようにイスに座らせたなら、皆が良いアイデアを思い付くかということ、決してそうではありません。ですから、アイデアは会社のもではなく、個人の財産ですよ。会社で条件を整えれば出るものではないですから。

竹内 宏氏

新興セルビック社長
新興金型製作所社長

【たけうち ひろし】

1946年生まれ。65年目黒工業高校機械科卒。70年都南金型製作所（新興金型製作所の前身）入社。72年新興金型製作所専務。84年社長。85年カセット金型を開発。87年新興セルビック設立。



モノ作りに携わる人が最も喜びを感じるのは、自分のアイデアが製品や形になった時です。これは、手助けした僕もうれしいですが、やはり提案者が一番うれしいものです。それで新興セルビックでは、差し障りのない程度に、商品名にその人の名前を入れているのです。

例えば最近、製品として日の目をみたものに「サブマリン AB」と名付けた放電加工機用のツールがあります。加工物を斜めに取り付ける代わりに、電極を斜めに傾げるためのツールです。これは阿部さんという方が考えたアイデアで生まれた製品です。ABというのは「阿部」をもじって付けたのです。

金型の経験があると 多様な角度からモノ作りが見える

Q 一方で金型メーカーを経営していることが、アイデアを具体化するという事業に何か良い影響はありますか。

A 金型を作っていると、アイデアの出方が違います。というのは、例えば何か機械を作らなければいけないと言った時に、その作り方はどんなものでも、だいたい1通りか2通りしかないものです。金型は違うのです。単純な金型でさえ、30通りから40通りの作り方があるのです。

ですから、金型を作っていると、いろんな角度からモノ作りを見られるようになるのです。

非常に優れたアイデアがあったとします。それを形にしようとするれば、まず図面を描かなければいけません。次に、それを加工する必要があります。パテントの問題もあります。そんなこんなで、発案から実際に物が出てくるまでには少なくとも1年ぐらい掛かってしまいます。日常の業務を持っているとやはり、アイデアを製品にするという仕事を追い掛け切れなくなるのが普通です。

僕は、軍団から出てきたアイデアをすぐに具体的な形に変えることができるのです。中学2年の時から家業の金型作りを現場で手伝った経験が、大変役に立っているのです。いろんな視点から機械の動きを検討できるし、いろんな角度から物事が見られます。それに、金型を作る人、使う人、成形する人、いろんな人の悩みが分かることも、アイデアを具体的な製品に仕上げるのに役立って

います。

Q 金型メーカーはどこも人手不足で、後継者問題は業界全体の課題になっているのではありませんか。

A 金型は製造業の基盤になる産業です。技術が進んでいくにつれて、型に金属を使わなくなるとか、型の中を流れるものが樹脂でなくなるといったこともあるかもしれないが、型というものは100年や200年は長くとみています。

ところが金型業界は今、後継者不足で悩んでいます。金型がこんなに面白いものだということをアピールする努力を十分にやって、それでも若い人たちが金型業界を選ばないなら、金型がほろびても仕方ありません。しかしその前に、金型の面白さを精一杯訴える必要があります。アイデアを製品に具体化するという事業に力を入れているのも、一つには金型の面白さ、奥の深さを何とか若い人たちに伝えられないかという思いがあるからです。

（聞き手は本誌副編集長・山岡則夫）